

アメリカのファシズム小史

【訳者注】これは、アメリカの隠れた暗黒の歴史を解き明かす、貴重な論文だと思われる。なぜアメリカが、今日のような「病的」(p.10)ともいえる異常な状態を見せるようになったのか、その歴史的経緯のかなりの部分が、ここに示されていると思われる。アンドレ・ヴルチェクの前の告発の論文ともつながっている。「戦略的宣伝の父」と呼ばれるエドワード・バーネイズのことや、アレン・ダレス(年配者なら知っている)の犯罪的なナチスとのつながりなど、筆者を含めて、知らなかった人は多いと思う。しかしこれを読めば「なるほど、そうだったのか」と思うだろう。今日のアメリカ帝国が、悪質なプロパガンダを支えとしており、その体質がナチス・ドイツに非常に近いことは、誰でも気づいているからである。

プレスコット・ブッシュ以下3代の、ブッシュ家のナチスとのつながりについては、[ここ](http://www.dcsociety.org/2012/info2012/160309.pdf)をご覧ください：<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/160309.pdf>

Shawn Hamilton

Global Research, October 19, 2016



普通、「ファシズム」という言葉は、礼儀ある会話では使われず、最近まで、ナチス・ドイツと現在のアメリカの間の並行関係を指摘するような者は、「陰謀論者」であるかのように、古臭い非難の眼で迎えられたものである。現在の大統領選では、それが変わってきたとように見える。そこで私は、私の祖国アメリカのファシズムに関して、ずっと考えていたことの一部をここで述べるための、時期が到来したと考えている。支配者の富裕階級は、明らかに、国家という船をその流れに乗せて運ぼうとしている。だからもしファシズムが、我々の生活の一部として運命づけられているとしたら、我々は、部屋の中の醜い象が見えないかようなふりをするのをやめて、何らかの反応をすべきであろう。

現在アメリカに存在するファシズムを論ずるには、正確なその定義が必要になってくる。鍵十字とか皮長靴とか死の収容所といった、おぞましいイメージのもっと奥にあるものを見ることができれば、前提としての人種的優越感のような、いくつかのファシズムの要素が、

アメリカには初めから存在し、我々がこれまで理解していたより、もっと深いものであることが理解できるであろう。

アメリカの奴隷売買、現在もあるアメリカ原住民のジェノサイド、Ku Klux Klan やネオナチズムの台頭、といったものを引き起こした歴史的な人種差別は、すべてファシズムの衝動に含まれる徴候を具現するものだが、私はここでは、この“ファシズム”という言葉を、第二次大戦後のコンテキストにおいて、道徳を持たない暴君としての大企業の出現を含めて使っている。 <https://www.youtube.com/watch?v=Phre0bArD0M>

ベニート・ムッソリーニは、ファシズムを、大企業と国家権力の合体と定義したとよく言われるが、実際にそう言ったかどうか確かな証拠はない。1932年版の『イタリア百科事典』に、ムッソリーニは、「ファシズムは、国家を、個人の真の現われとして再確認する」と書いている。それが事の核心にあるかもしれない。なぜなら、それは「我々は人間として、どこかの国家に従属するのか？」という倫理的問題を提起するからである。私には、個人主義を重んずる伝統的なアメリカの価値は、それに反する主張をしていると思える。

アイゼンハワー大統領は、1961年の退任演説で、強力な企業の影響力に触れて下のように言った。そこで彼は、それをファシズムとは呼ばなかったが、「軍 - 産複合企業」だとして警戒を呼び掛けた――

「政府のいろんな評議会において、意図したものかどうかはともかく、軍 - 産複合企業の不当な影響力が現れようとしていることに、我々は警戒しなければなりません。場所を心得ない権力が台頭して、大きな災いがもたらされる可能性が存在しており、今後も存続するでしょう。

「我々は決して、この結合の力に負けて、我々の自由や民主的なプロセスを、危険にさらすようなことがあってはなりません。どんなことも当たり前のことと考えてはなりません。機敏な、知識をもった市民層だけが、我々の平和な方法と目標によって、巨大な産業と軍事的な防衛機構を正しく織り合わせ、安全保障と自由を、うまく両立させることができるのです。」

私は、アイゼンハワーが、職を辞するときまで待ちましたが、この重要なことを言ってくれたことに感謝する。『オックスフォード英語大辞典』は、**ファシズム (fascism)** を「政治システムの一つで、その特徴は、厳しい一党独裁、反対者の力による弾圧、中央集権の政府支配の下での生産手段の私的所有、好戦的な国家主義と人種差別、戦争の栄光化」だと定義している。



この言葉の原義はラテン語の *fascis*、「束」である。このシンボルの歴史はよくわからない。

おそらくそれは、最初エトルリア人が、後に古代ローマ人が用い、権力と権威を象徴するものだったと思われる。*Fascis* において、個々の棒は寄せ集まって強力な単位になっている。これは“*E Pluribus, Unum*”、アメリカの国家的モットー、「多くから一つを」を意味する。この関連から、なぜ *fascis* が、米下院の演壇の両側に見られるかがわかるだろう。

1919年、ムッソリーニはミラノにファシストを配置し、“過激グループ”を制圧しようとしたが、それは社会主義者のことだった。

共産主義者や社会主義者への憎しみは、現代ファシズムの第一の宗教的教義であるようだ。もっとも、ナチス・ドイツに見られるように、他のグループも、軽蔑される“他者”の範疇に含まれ、互換が可能である——ホモセクシュアル、肌の黒い民族、移民、平和主義者、過激派、スラブ民族、ユダヤ人、ジプシー、それに良心的ジャーナリスト、学者、また国家の絶対的権力に反対し脅かすような、背景をもつ市民すべて。人々は、その一つか、いくつかに該当すれば、ファシズム団の標的にされた。

ナチスとは、「国家社会主義ドイツ労働者党」のことであり、歴史を通じて現れた多様な、人種差別の前提と、ファシストの精神構造をもつ集団の一つにすぎない。



「独米ブント」の夏キャンプ、ニューヨーク、ロングアイランドにて、1938（ホロコースト歴史博物館による）

1933年、ヒトラーが首相になったとき、副総統ルドルフ・ヘスは、キリスト教宣教師としてアメリカに入国したハインツ・シュパンクノーベルに、アメリカのナチ組織を創る認可を与えた。1936年までに、この組織は「独米ブント」と呼ばれるようになり、ナチス・ドイツとヒトラーの宣伝をする、アメリカの団体だった。

夏の青少年キャンプを、ニューヨーク、ロングアイランドで行った**独米ブント**は、1939年には、2万5,000人の会員をもち、絶頂期にあった。彼らの2万2,000人近くがマディソンスクエア・ガーデンに集まったが、その名目は、ブントのリーダーたちが“アメリカの最初のファシスト”と考えた、ジョージ・ワシントンの誕生日を祝うためだった。数千人のブント・メンバーは、またヒトラーの親衛隊、「褐色シャツ隊」とも呼ばれる「突撃隊」(SA)でもあった。第二次大戦の初めには、多くのブント・メンバーが捕虜収容所に入れられ、一部は戦争の終わりに送還された。しかし多くはアメリカにとどまっていた。



独米ブントのパレード、ニューヨーク市、東 86 番通り、1939 年 10 月 30 日
(Wikimedia より)

1933 年にヒトラーが権力を掌握したとき、この総統は、有名なニューヨーク市の宣伝会社 Carl Byoir & Associates を雇って、彼のアメリカでのイメージを改善しようとした。この会社の顧客には、アメリカ・タバコ会社、Proctor and Gamble、ゼネラル・モーターズ、その他の多くの会社があった。この会社の提携者の一人に、Edward Bernays がいたが、これはジークムント・フロイトの義理の息子で、今日の PR 批判者が、PR やスピン（非常に偏った PR）の“父”と考えている人物である。

ほとんどの人は、彼や、彼の著書 *Crystallizing Public Opinion* (1923) や、*Propaganda* (1928) のことは聞いたことがないが、雑誌「ライフ」は、バーネイズのことを 20 世紀の最も影響を与えた人物の一人にあげている。有名なドイツの精神分析学者の親戚として、バーネイズは、“無意識”とサブリミナルな動機の力学への洞察力をもっており、彼は短期間に巧妙に、アメリカ人を騙す方法を開発した。それは彼らに、必要でもない下らぬものを買わせ、喫煙の習慣をつけさせ（後にはそれをやめさせる運動もしたが）、そして政治的には、人々が、自分の利益に反して、政策を受け入れるようにする方法まで開発した。

彼はこれを“操作的合意”と呼び、民主主義にとって絶対に必要なものと考えた（確かにそれは「第三帝国」にとって重要だった）。これを単に“プロパガンダ”と呼ぶ人もいるが、直接の強制がうまく行かない場合には、それは民衆をコントロールする方法として売り込まれた。アメリカの広告は、バーネイズの説得力あるテクニックに大きく依存していて、人

種差別的・エリート主義的な前提を反映しており、そこには、民衆は無知だから自分でうまくやることができず、指導してやらないといけないという、親の保護のような、しかし同情を伴わない見方が働いている。大衆に売りつけるものがハンバーガーであろうと、戦争であろうと、同じようなテクニークを用いて、この“超人”階級を自認する者たちは、心理学という“科学”から得た、惑わしと騙しの方法を用いて民衆を“導き”、その過程で彼らから、カネと自由を巻き上げたのである。

バーネイズは、1950年代初期に、「ユナイテッド・フルーツ会社」のために、政治的なプロパガンダをうまく操って、人気のあったグアテマラの大統領 **Jacobo Arbenz Guzman** を失脚させた。そのやり方は、この改革者を、神を信じない共産主義者だとして中傷し、アメリカに支援されたクーデタに道をつけてやるものだった。“バナナ共和国”という言葉は、「ユナイテッド・フルーツ」が、利益をむしり取ったグアテマラや他の中米諸国の、腐敗した政府をコントロールしたことに端を発している。この会社の残忍な方針と、労働者の非人間的な扱いは、アメリカの消費者にはより安いバナナを、その国の農民には貧困をもたらす結果となった。アルベンツ大統領は、極端に富裕なエリートと、グアテマラの貧民の格差を小さくしようとしたために、1954年のCIAの仕組んだクーデタによって職を追われた。このエピソードは、多国籍企業というものは、強欲でずるく、背後には軍事力をもっていて、誰でもこの団体に反対すれば、人生が地獄になりかねないということを、多くの人々に明らかにした。

Daniel Kurtz-Phelan は、ピーター・チャップマンの *Bananas, How the United Fruit Company Shaped the World* に対する、2008年の ニューヨーク・タイムズ書評 で、この会社を「多くの国民国家よりもっと強力で、…自分自身が法である」と評し、こう述べている—— http://www.nytimes.com/2008/03/02/books/review/Kurtz-Phelan-t.html?_r=0

「ユナイテッド・フルーツ」は、現代の多国籍企業の、最も効果的で、…しかも次第にわかってきたように、その最も害悪の大きい面を示している。国内では、彼らは権力者とクラブ的な関係を築き、PRと取引の現代的技術の開発を手伝っている。世紀半ばの“PRの父”エドワード・バーネイズによる革命以来、この会社は「セニョリータ・チキタ・バナナ」という漫画のキャラクターを流行らせている。海外では、彼らは独裁者を大事にし、その労働者をコントロールするために、保護者ぶりと暴力を混ぜて使っている。 <https://www.youtube.com/watch?v=RFD0I24RRAE>

抑圧的政府については、チャップマンは *Bananas* の中で、「ユナイテッド・フルーツ」が彼ら政府の最上の友人で——特にありがたいのはクーデタをやってくれることだ、と書いている。Kurtz-Phelan は、「〈ユナイテッド・フルーツ〉は、おそらく、石油の名において行

われたよりも、バナナのために、より多くの“政権交代”を仕掛けたであろう」と言っている。そして彼は、この会社の後継者「チキタ・ブランド・インタナショナル」は、コロンビアの殺し屋右翼団に、200万ドルを払ったと認めたと指摘している。エドワード・バーネイズの説得力あるテクニックは、アメリカの大衆に、残虐行為のうわさを無視させ、儲けに役立つ政府の政策を支持させるのに必要な、合意を作り出すのに欠かせないものだった。

ドイツのプロパガンダ：ヨゼフ・ゲッペルス

ドイツの宣伝相ヨゼフ・ゲッペルスは、バーネイズを称賛し、彼がユダヤ人であるにもかかわらず、彼の仕事に倣った。このテクニックはあまりにも有効で、無視することはできなかった。ゲッペルスが、ファシズムのイデオロギーをドイツの大衆に売り込むのに使ったプロパガンダは、バーネイズから学んだものだった。

アメリカのファシズムの底流が、Smedley Butler 少将の鋭い感覚に捕らえられた。彼は勲章を与えられた米海兵隊員で、1935年に *War Is a Racket* (戦争は恐喝だ) という本を書いた。彼は連邦議会委員会の前で、ある有力な企業家のグループが、ファシストの退役軍人を結集して、フランクリン・ルーズベルトを暗殺し、クーデタによって政府を転覆させようと計画していると証言した。その当時のニュース・メディアは、バトラーを軽視して、この事件をペテンと呼んだが、議会委員会はバトラーの証言は信頼できると結論した——ただ誰も起訴された者はいなかった。同じようなシナリオが、その30年ほど後に起こり、今度は成功して、ジョン・ケネディ大統領が待ち伏せされ、非常に疑わしい状況下で殺された。彼の暗殺には多くの理由があるが、彼が、多数のナチスの巣窟だった CIA を廃止しようとしたことが、第一の理由だったかもしれない。



ケネディ大統領とアレン・ダレス、1962頃



ヨゼフ・ゲッペルス

ケネディ暗殺と実相隠ぺいのカギとなる人物は Allen Welsh Dulles (1893-1969) だった。

米情報部の中心人物だったダレスは、ナチのエリートたちと交わり、ファシズムを構想し、戦時中は中立国のスイスに住んでいて、ずっと前から、ユダヤ人や他の不幸な人々に何が起きているのか知っていたが、それを止めるために何もしなかった。戦後、ダレスは彼のナチ関係者のために、特にニュルンベルクで戦争犯罪の裁きを受けている者たちのために、精力的に働いた。そしてナチスのテクノロジー（とイデオロギー）を、第二次大戦後のアメリカにもたらすように積極的に取り計らった。どう見てもダレスは逆賊であった。ところが彼は、長老の政治家、外交官として記憶されている。

1947年、議会は国家安全保障法を設け、それによって中央情報局（CIA）を創ることが可能になった。ダレスがCIAを設置したのは、本質的にはOSS（戦略情報局）の名を変え、元のOSSの活動の中に、ドイツの将軍であったラインハルト・ゲーレンのスパイ装置を、そのまま取り込むことだった。ゲーレンを通じて、ダレスは、すでにソ連に向けられていた、広範囲な、出来合いのスパイ網を継承し、我々が今日、理解もできず好きにもなれない国家安全保障国家の端緒を作った。



今日のCIAは、したがって、ナチスの情報局を直接、取り込んだものであり、ゲーレンのナチ・スパイ網を踏襲し、多くのナチの要員によってスタッフを固めた。ダレスが、1963年のジョン・ケネディ大統領の死を“調査する”（あるいはもみ消す）ための、ウォレン委員会に指名されたことを考えてみるがよい。これは、起訴された殺し屋オズワルドが、“ナチス”が暗殺にかかわっていた、と言ったときの意味だったかもしれない。しかしアレン・ダレスは、ゲーレンの過去に何の問題も認めなかった。「彼は我々の味方だよ」と、ダレスはあるとき笑って言った、「そしてそれだけが肝心の問題だ。」

Reinhardt Gehlen (ホロコースト歴史博物館)

2015年10月、*Democracy Now* を主宰する Amy Goodman が、David Talbot をインタビューした。タルボットの書いた *The Devil's Chessboard: Allen Dulles, the CIA, and the Rise of America's Secret Government* (悪魔のチェスボード：アレン・ダレス、CIA、およびアメリカ秘密政府の出現) は、秘密主義だったアレン・ダレスに、大いに必要とされた光を投げかけている。タルボットは、グッドマンのナチスに関する質問に応じて言った――

David Talbot: ナチスですか、そう、彼ら多くのナチ・ビジネスマンは、ダレス・ブラザーズとの間に、非常に緊密な関係をもっていました。アレン・ダレスは、戦争中スイ

スにいて、我々の側、OSS のために働いていたことになっていますが、彼は実はその機会を利用して、多くのナチスと出会い、彼らと別々の取引をしていました。彼は最終的には、実に、フランクリン・ルーズベルトの意志に逆らって、イタリアのナチ軍と特別に平和取引をしたのです。ルーズベルトは無条件降伏の計画を持っていました。

Amy Goodman: それが“ペーパークリップ作戦”だったのですか？

David Talbot: これは“サンライズ作戦”で、彼が考えた取引でした。そこで彼はいわば逃げ道を作ってやりました。ナチス、主導的ナチ戦犯は、戦争後、そこを通過してアルプスを越え、スイスに入り、またイタリアへ下りてきて、海路、ラテンアメリカやアメリカにさえ入りました。彼が救った主要なナチスの一人が、ラインハルト・ゲーレンでした。彼はヒトラーの情報部チーフだった人物で、ダレスはこの男、ニュルンベルク裁判で裁かれるはずだったこの男を、戦後、西ドイツ情報局のヘッドに据えたのです。

CIA がロシアについての情報を、ロシアに敗北させられたナチス当人から得ていたことを考えると、米情報局のロシア評価が、戦後の冷戦中の緊張の高まっていく時期に、高度に偏った、危険なほど曲がったものになったのは、大いにあり得ることである。アメリカは素朴にも、ロシアを悪魔だとするナチスの性格付けを、そのまま受け入れていた——ロシア人は戦争中、我々の同盟者だったのだから、非難でなく、感謝して然るべきだったのに。彼らは結局、膨大な犠牲を払って第二次大戦に勝利した。以前の敵から与えられた“情報”によって、ロシアとその指導者の評価を形成することが、果たして賢明だったろうか？

私の考えでは、この馬鹿げた方法を取ったことが、理解しがたい、ファシスト的な、戦後のアメリカの、公然たる、また密かな、政策の多くを説明すると思う。それは過去 65 年に及んで、我々が恐怖をもって覗いてきたものである——1950 年代の共産党魔女狩り、ひそかなマインド・コントロール実験 (MK ウルトラ)、1960 年代の、ケネディ兄弟、マーティン・ルーサー・キング Jr.、マルコム X、それにブラック・パンサー Hampton と Clark らの暗殺、ベトナム戦争の機械化された殺戮、1970 年代の、ゴ・ディン・ジエムやアジェンデのような、民主的に選ばれた外国の指導者の転覆と殺害、暴君としての大企業の出現、我々の聞いたものも聞かないものも含めて、多くのニセ旗作戦など。これらの事件が目標として共通にもっているのは、自由の縮小とコントロールの拡大で、それはジョージ・F・W・ブッシュが 1991 年 9 月 11 日のスピーチで、傲慢にも成功すると誇ってみせた New World Order を軌道に乗せるためであった。

アメリカの何十年にも及ぶ、“共産主義”や“共産黨員”への非合理的な憎しみや恐怖は、戦後に、ロシアを憎む、改悛しないナチスを、大量に輸入したことの、予想しうる付随効果だ

ったとして説明できるであろう。彼らはその家族と共に、ダレスの取り仕切る“ペーパークリップ作戦”によって、何百人とアメリカに入ってきた。これらのナチスが大量に流入して、アメリカの国家安全保障の高い地位と影響力をもったことは、意図的かつ違法であり、それは、2人の米大統領の親、プレスコット・ブッシュのようなナチ・シンパサイザーたちが、ナチ党の建設の財政援助をしたこととつながっている。それは、戦後のアメリカの病理的な政策や、多くの説明できない出来事——暗殺、クーデタ、ニセ旗攻撃、不法な戦争など——について多くを説明するものである。